

神奈川支部情報

第 22 号発行日 2011 年 9 月 22 日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046 (871) 4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

郵便振込口座 00190-2-114578

去る 7 月 24 日にかながわ県民センターにおいて「震災・原発事故から『あの戦争』を考え直そう！」をメインにして、第 10 回神奈川証言集会が開催しました。70 名の参加によって盛大な集会となりました。

戦争、シベリア抑留、撫順戦犯管理所を体験された絵鳩毅さん（98 才）は、じつは関東大震災も体験されていたのです。第 1 部は「東日本大震災の復興に望む」～前車の轍を踏むなかれ～、と題して絵鳩さんにビデオ講演をしていただきました。絵鳩さんは「関東大震災の復興の道は戦争への道だった」と喝破しました。講演内容は「第 21 号神奈川支部情報」に収録しています。

つづいて、第 2 部は、「加害を伝える意味」～ 平和のために学ぶべきこと～、と題して藤田秀雄先生（立正大学名誉教授・元第 5 福竜丸平和協会副会長）に講演していただきました。

藤田先生は平和学の研究や平和運動に携わってこられるなかで、かねてから中帰連の加害証言にも深く注目してこられました。藤田先生に、絵鳩さんのこれまでの証言にも触れて頂きながら、加えて戦後の原水禁運動から、地元横須賀での原子力潜水艦・空母の寄港反対、母港化反対の運動を指導された先生ご自身の体験にもとづいて、福島原発事故と、米原子力艦の危険性についてもお話ししていただきました。時宜にかなった内容となりました。以下、藤田先生の講演内容を紹介します。（最終ページに講演レジメを掲載しました）

第 10 回神奈川証言集会報告（第 2 部：藤田秀雄先生講演）

加害の事実を伝える意義と平和のための学習

藤田です。与えられた時間が限られていることと、先ほどの絵鳩さんのお話があまりにすばらしい話だったので、そのあとの話としてふさわしい話ができるかどうか、少しとまどいはありますが、お聞きねがいたい。

私の専門はなにかというと、ひとつは教育学です。教育学といっても子供の教育のことではなくて、大人の学習の問題です。それはなんなのかというと「教育と戦争」の問題を考えて教育学を選んだのですが、問題は子供たちより大人たちにある。また、一般の社会で新聞やテレビなど、昔だったらラジオや映画

などです。そういうものによって行われる宣伝、プロパガンダ、その方がまたはるかに大事なのだということです。また、親たちはかつては「治安維持法体制」という意味の状況のなかで、さまざまな情報を得ることができなかった。ものを言うこともできなかった。

そういう状況の中で戦争に入っていくわけですが、戦後はそれが民主化されて、しかも憲法の 12 条ではこの「憲法に定めた自由及び権利」の項があります。その権利の中には当然、「平和に生きる権利」が入るわけで、まず子供よりもまず、大人たちがそのための不断的努力をしなければいけない、と書いてあるのです。そういう不断的努力をするような、そういう大人たちにならないといけないわけで、その大人たちの学習や、あるいは文化運動などがどうあるべきかということを問題にしたくて、「社会教育」という、学校教育ではない領域を選んだのです。日本ではこの領域を選んだのは私が最初なのです。

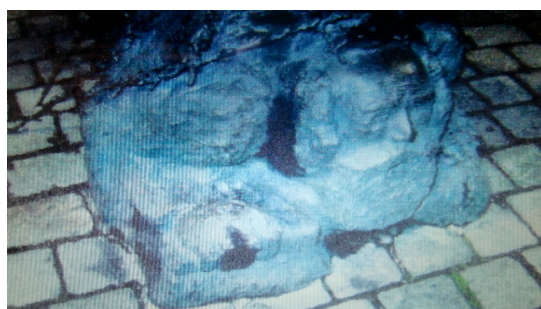
もうひとつは「平和学」なのですが、少し経って日本平和学会ができて、国際的な平和研究とのつながりができて、そういうなかで学んできました。そういう経験に基づいてお話をします。最初に、加害の問題でウイーンのことをお話をします。

「戦争とファシズムに対する戒めの記念碑」(ウイーン)

一番上の、この写真(コピー)は下の解説文に書いてあるように「戦争とファシズムに対する戒めの記念碑」という意味です。オーストリアはドイツに併合されました。しかし日本が朝鮮半島を併合したこととは違って、オーストリア側から、かなり積極的にヒトラーのナチスと併合するという動きがあった。またそれ以前からオーストリア国内でナチズムの運動が起っていました。それはユダヤ人に対する差別、さらには収容所送りの活動ですが、そのもっと前から、すなわちドイツと一緒にいる前からユダヤ人への差別がおこなわれていたのです。

真ん中の写真の像は上の写真の前にあるのですが、これはユダヤ人の老

人がうずくまって、大きなタワシのようなブラシを持たされて、人が歩いた後の道を掃除させられている、という像です。



この像が作られたのが 1988 年です。戦争が終わってずーっと後に作られたのですが、ウイーンのもっとも人が集まる街の中心の所に、かつてのユダヤ人に対する差別とユダヤ人への死の強制に加担した、というオーストリ

ア政府やオーストリアの国民が再び戦争やファシズムの道をたどらないように、ということの戒めのために作った碑です。

ウィーンの街の中央が城壁に囲まれていて、リンクと言いますがその部分を全部とり払って広い道をつくって、路面電車も通れるようにしました。そのちょうど南側です。そこには王宮があって、その南側にオペラ座があります。オーストリア・ウィーンと言えば、なんといっても音楽の街ですよ。その中心はオペラ座ですよ。日本人が訪れればみんなそのオペラ座へ行きます。オペラを見なくてもオペラ座の

見学には行きます。

ウィーンの人たちにとってオペラ座はよりどころです。その脇に昔の王宮があって、その間にこういう碑があるということ、これは大変重要なことだと思います。日本でいえば東京駅と皇居の間にこういう碑があるということです。ところが、東京にこのようなモニュメントがなにかありますか。私は何10年も気にしているのですが、西郷隆盛のあの銅像ですね。あれを見て朝鮮半島の人は何を思いますかね。戦後もあれを壊さずに維持しつづけてきたところに、日本の現在の問題がある、と私は思いますね。

加害の学習をさまたげるもの

そこで私たちは加害の問題について学ばなければならないわけですが、それは妨げられてきました。その一つは再軍備とその後の軍備拡大のためであろうと思います。自衛隊ができました。その中でとくに海上自衛隊は、ほとんどが元海軍の軍人たちが中心になって作り上げられたと言われていて、これは陸上自衛隊と違う点だと言われていて、

学校の教科書で加害の記述が削られるようになったのは、そのことと関連していると思われます。文部省のその頃の発言などを見てみますと、やがて旧海軍の軍人が海上自衛隊から去っていった。その翌年から文部省の態度が変わってきました。「侵略」というような言葉を教科書に載せるよう

になりました。それと入れ替わるように「新しい教科書を作る会」などあたらしい教育学者、藤岡某などという人とか若い小林よしのりとかいう、あのような人たちが新しい右翼的な運動をやって、教科書の内容に攻撃をし、自分たちで新しい教科書を作ろうというようになっています。

つまり、当初の段階では日本の再軍備政策、軍備拡大の政策が加害の学習を妨げていたのです。戦争中の日本の軍隊がなにをやったのかということ、を明らかにしたら、旧軍人たちが自衛隊を指導することはできなくなります。もっと根源的なものとしてはあのような否定的な事実を認めたくない、という日本人のナショナルな心情があるのでしょう。

たしかに、自分の家族や、自分に関係する人や、あるいは組織などが、かつての否定的な事実が明らかにされるということはいやだ、という気持ちが素朴にはあるでしょう。しかし、この場合は背後に日本以外のアジアの人々への差別意識に裏打ちされていることから、このことが容易にとり払われない、という難しい問題があります。

以前、私は中野区の教育委員会から依頼されて、毎年平和講座で話しをしました。そのとき、際だって反応が分かれたことがあって、今でもよく覚えています。

私が加害のことを話したとき、それについて藤田の言うことはけしからん、という反応が出たのはちょうど半分で男の側でした。そのときはたまたま教室の左右に男女が分かれて座っていました。男の側はそのような発言はこぞって、「けしからん」という意見でした。女性はそうではなかった。この男女の考えの違いはなんなのか考えさせられました。これは大きな問題ですが、男性と女性の問題というのは、比べてみると今日まで男のほうは差別する立場だし、女の方は差別されるほうの立場であるということが歴史的にはあるわけで、それがなんらかの働きをしているのではないかと思います。だが、私自身はどうもわからない問題です。しかし鮮やかに男と女の反応が違っていたことは今でも覚えています。

そしてそのあとも3年くらいは続

いたのですが、そのときの話が原因なのでしょうか、それ以来中野区から来てくれという話はなくなりました。そのように日本の社会は、加害を学ぶことに対する根強い拒否反応はまだまだ続いていますね。繰り返しになりますが、その背後にあるアジアの人たちに対する差別意識です。

先ほどのDVDで、絵鳩さんが関東大震災のときのことを話しておられました。あのとき、朝鮮半島から来た人、中国から来た人たち、たくさんの人が殺されました。そのときの要旨を記した資料の記述を見ると、たくさん日本人がお寺などに集まって、一人一人殺していくのです。そして一人が殺されるたびに、とり囲んだ日本人の群衆が“ときの声”をあげた、というような記述があります。たいへん恐ろしいですね。

もともと日本人は中国の人への差別意識はなかったわけです。明治のごく初めにはむしろ日本の文化の源は中国にあったこととして敬意をはらっていたのです。それが日清、日露の戦争で、とくに日清戦争で中国に対して「チャコロ」というような差別用語が生まれたりして差別意識が広まってきました。そして、中国だけでなくアジアの人たちへの差別意識となって、その後それが定着してしまったのです。戦後、中国の人たちに対してや、アジアの人たちに対する感性、差別意識の転換が行われないままに今日までできたのです。これをどうするか、大変重要なことですね。

まず、教育面の上で、日本の学校教育ではそのことが十分に行われていません。社会教育の面でもまだまだ弱いわけですが、いくつかの博物館といわれるところでは、右翼の攻撃を受けながらもその努力を続けてきています。そのことはご存じのとおりです。



京都で平和博物館の国際会議が開かれました。そこにはいろんな国から集まってきました。実際日本ではずばぬけて平和博物館の数が多いのです。しかし、加害の問題を伝えるというところはたいへん少ないのです。少ないなかでも、一つは早稲田にある「女のための戦争と平和博物館」(WAM)です。もうひとつが中帰連平和記念館、さらにもう一つは、ここは加害のことが専門ではありませんが、早稲田のもう少し北の方にある高麗博物館があります。日本と朝鮮半島との歴史的な関係を明らかにする、そういう博物館になっています。この3つが特に大事なのだということを国際会議で発言させていただきました。まだまだ弱いですね。

そのあとにできたのもあります。大館に、主に中国からの強制連行された労働者たちが戦争末期におおぜい殺

された事件がありました。その事件を明らかにした花岡記念館が最近出来ました。私もカンパなどで協力しました。

さらに、北海道の北の方の^{しまりない}朱毬内と

いうところで、^{とのした}殿下さんというお坊さんが中心になって韓国や北朝鮮系の若者たちと一緒に、強制連行で連れられてきて軍事的な目的で大きなダムが造られ、過酷な労働と虐待のために死んでいった人たちの遺骨がまだ残っているのです。国際的な若者たちの組織を殿下さんたちが中心になってつくってその遺骨を掘る作業を行っています。その地域の中にも小さな資料館があります。旭川からずーと行ったところにある朱毬内湖という湖の脇です。こういうおぞましい事件があったことが資料館でわかります。このように、加害を伝える資料館が増えつつはありますがまだまだ弱いですね。私たちは、この現状をどうやってのり越えるかということが大変重要な課題だと思います。こうすればいい、といううまい方策などはないと思います。今日のような集まりの積み重ねること。これ以外にないように思います。

そして、この加害の事実を大切にすることとはどういうことなのかについて、私が最近「月刊社会教育」という雑誌に書いた部分を読ませてもらいます。

しかし、加害の学習は今日に至って

もなお、不十分である。それは、政治的意図によってさまたげられてきたばかりでなく、学習者自身が、それを避けようとする傾向があるからである。それは日本人としての誇りを傷つけた事実を認めたくないというナショナルな信条にもとづく。そしてその背景には、日本人以外のアジアひとたちへの差別意識がある。

したがって、加害の事実を学び、それ

を認めるかどうかは、今後、日本人が、多のアジアの人たちと真に連帯できるか、できないかをきめる鍵である。カナダの友人マレイ・トムソンは、「どんな国でも、民族でも、恥（シェイム）の歴史はもっている」と言っていた。事実を認めようとしない国民を、被害を受けた国の人たちは、信頼しないであらう。（「月刊社会教育 5 月号より」）

戦争学習をさらに進めるために

先に進みます。

今後、戦争と平和のための学習を進めるためになにが必要なのか、であります。これまで戦争に関する、あるいは平和のための学習として二つのことが行われてきました。一つは広島・長崎、あるいは東京大空襲をはじめとする各都市の空襲の学習です。つまり被害の学習です。

もうひとつはなにか、というと 9 条の学習です。9 条はとにかく守らなければいけない、ということです。この被害の学習と 9 条の学習です。この 9 条の学習は新しくて、最近のいわゆる「9 条運動」の中で行われてきたものです。そこで、それだけでいいのかということをおは問題にしたいのです。

一つは、治安維持法を中心とする戦時体制の学習と、戦後の抑留・引き上げ体験ということが大変大事だと思います。たしかに「戦争の惨禍」ということは伝えるべきではありますが、

人々がモノを言えなかった、という体制、これをひとくくりにして“治安維持法体制”と言わせてもらえば、そのようななかに当時の大人たちはおかれていたわけですね。

その厳しさですが、私の個人的な経験だけを申しあげて恐縮ですが、私の子供時代の日記にそのことが見られる部分があります。戦中から戦後にかけて毎日書いていました。新聞記事なども書いてあったりします。昭和 19 年と 20 年の日記です。国民学校の終わりから中学 2 年まで、です。ちょうど大事な時期です。

その間、私は東京に住んでいましたので東京大空襲を経験しています。敗戦の日のこともそこには書いてあります。しかし非常に大切な日の日記について事実どおり書いていない日があります。45 年 8 月 15 日のことです。敗戦のその日のことはどう書いてあるかというと、「家族が全員集まって、玉音を拝す」なんて書いてありま

す。しかしそれは自分ではっきり覚えているのですが、真っ赤なうそなのです。そんなことはしていません。その日はたまたま家に私以外はだれもいませんでした。ものすごい暑い日だったですね。そこで私はパンツ一枚の姿で過ごしていました。そして寝ころんだまま、どうも話がよくわからないなあ、と思いながらラジオを聞いていました。

しかし「家族が全員集合して、ラジオの前に正座して玉音を拝す」なんて、実際の姿とは似ても似つかない態度だったのが現実です。ですが日記であっても事実は書けないのです。なぜか、今考えてみても子供でもなにかのつごうでその日記が誰かに見られた場合の恐れがあったのです。特高よりも憲兵の方がたいへん恐ろしいものだと思っていたし、じじつ、なんでもない人たちが憲兵にひっ張られていましたからね。そういう話をずいぶん聞いていましたから……。

それから東京大空襲のことも日記

には書いてありますが、“悲惨だった”なんてことは書いてありません。敵にやられて、その状況が悲惨だったなどということを書いてはいけないことだと思っていました。だからそこは書いてありません。このように子供の日記にさえウソを書かせたのはなんなのか……これが治安維持法体制なのですね。このように、戦争中の体制はどのようなものであったかを学ぶということと、戦争の終わったあとの悲惨さということも大変なことで、ここには経験された方がおられると思いますが、戦後の抑留や、引き上げの体験など、これはいろんな記述がありますが、とくに女の人たちの経験はたいへんなものでしたねえ。

そういうことがまだまだ知られていないし引き継いでいません。戦争とはなんだったのか、を知るためにはこのような勉強が大事です。

撫順戦犯管理所での事実を伝えること

そして、レジメの2に書いておきましたが、皆さんが学んでおられる「撫順戦犯管理所」での事実がどうであったのかということを伝えることが大切です。平和のために必要なものはなんなのか、これをつき詰めてみると私は、たいへん素朴なものだと思います。

一つは、人間的な感性が必要だと思います。ヒューマンな感性、これが根

底にあるのだろーと思います。しかしまた、この感性だけではだめなのであって、世界がどう動いてきたのか、動きつつあるのかという国際的な知見が必要です。グローバルな知性というものがないといけません。かつて日本があのような道をたどった一つの原因というのは、世界の動きを国民は知らなかった。それに、政治家もろ

くに勉強をしていなかったということがあるでしょうね。今でもやはりそうだと思います。政治的な指導者たちは勉強していない。だから私たちが勉強するしかないのです。そして政治を動かしていくしか仕様がなないのです。残念ながら・・・。

そういう時代から考えると撫順戦犯管理所で行われたということは、これは大変な歴史的な意味があることです。あの管理所をつくり、指導してきた人、周恩来の力が大きかったと言われていますが、周恩来だけの力ではないでしょう。その人たちのヒューマンな感性と、グローバルな知性、何10年も先のことを読みながら、日中との関係を考えながら、あのようなものとして作ってきたのです。私たちは考えなければいけないことだと思つづきます。このようなものを引き継がなければ日本と中国との関係や、アジアの他の国々との関係をまともにすることはできません。

そして戦争とはなんのかを考える場合に、あの第2次世界大戦のときの教訓としては広島、長崎のことだけをわかっていただけではだめです。それだけではいまの戦争や今後の戦争はわかりっこないですね。

1954年3月1日、第5福竜丸はアメリカ軍の水爆実験によって発生した多量の放射性降下物（死の灰）を浴びた。あれは日本が被害を被った最初の本格的な水爆の実験です。そしてこの実験は継続して1つのシリーズで6回行われたのです。その一番最初の

水爆実験にやられたのが第5福竜丸です。そのほかにも1000隻以上の日本のマグロ漁船がやられています。この事実はまだまだ明らかにされていません。その一番最初が「ブラボー」（バンザイと言う意味）という名前を付けたアメリカの水爆実験だったのです。この水爆1発で広島の実験の1000倍以上の破壊力があるのです。

だから核兵器といった場合、広島・長崎を知るのもいいですが、いまや水爆の時代で、こんな大きなものができているのだということをやはり知る必要はあるでしょう。また、ベトナム戦争の時のことです。皆さんもご存じでしょうが第2次世界大戦のときに使った爆弾の総量は、高性能火薬にして3メガトンといわれています。だが、ベトナムのあのせまい地域にだけで7メガトンもの爆弾が使われたのです。

それに枯れ葉剤です。使われたのはばく大な量でしょう。その成分のダイオキシンは青酸カリなんて問題にならない強い毒性が含まれている。このことは軍の指導部も、アメリカ政府もわかっていて播いたのです。枯れ葉剤を製造している会社からダイオキシンが入っていることは政府にはちゃんと伝えられていました。わかっていてやったのです。戦争というものはそういうものなのです。そういうものになってきているということを私たちは知らなければいけないのです。あのアジア太平洋戦争が終わってから半世紀以上経っています。この半世紀の

間に、戦争というものがこんなにひどいものになってきたのです。

日本近現代史博物館の必要

もう一つは、日本の近現代史の学習です。みなさんも行ったことがありますでしょうが靖国神社の遊就館ですが、あそこへ行くといつも入場者がいっぱいです。あきれるくらいいますね。しかも若い人が多いですよ。どうして若い人が多いのかというと、遺族会の動員などもあるでしょうが、なん回も行って見ているとそうでもないなあ、と思うようになってきました。

あるとき、イギリスの大学を出て高校の教師をやっている人を連れて遊就館へ行ったことがあるのですが、その彼が見たあとと感心しているのですね。それはなにかというと、今の若い人は日本近現代史の勉強をしていないのです。高校などでもだいたい明治の初めまでですね。日清、日露戦争などはなにも学ばないままに社会人になっていくのです。

だが、若者たちも日本に住んでいてやはり歴史は知りたいという気持ちはあるのです。だが知るところがないのです。そこで一番手軽に、簡単に歴史がわかる場所という靖国神社の遊就館なのです。あそこへ行けば半日でわかるのです。

ところが、あそこでわかる歴史は「戦争のための歴史」であることはいうまでもない。まず加害のことなにもない。「治安維持法体制」に関わるような展示もない。そういうことで、た

いへんゆがんだ近現代史を並べてあるのです。それを見て感心して帰るといふ状況があるのです。

これに対抗して、近現代史を学びましょう、ということをつくらなければいけないですね。学習会を各地につくらなければいけないですね。そのことが私は大事なカギだと思っています。



じっさいに博物館で、それができたところがあります。佐倉に現代歴史民族博物館ができました。さっそく見に行きました。スペースは小さかったが、明治の初めから戦後の高度経済成長とそれが破綻する、そのあたりまでの歴史が展示されていました。水俣問題も展示されていますし、沖縄の基地問題も少しですが展示しています。しかしなにせ、スペースが小さいです。そして先ほどから指摘している加害の問題などはまだまだ弱いですね。どのようなこういうものをつくるかということが私たちの課題だと思います。

軍拡の学習と対立の解決

レジメの裏に移ります。さらに「軍拡と軍縮の学習」といいいいでしょう。それと「対立」の関係です。この「対立」という概念は日本語と外国語の関係でこまるのですが、英語で言うと **conflict** と言います。紛争解決のことを **conflict resolution** と言います。**conflict** とはそれ以前の段階です。平和学ではこの **conflict** を解決するということがたいへん大事なことです。つまり「対立」を「紛争」にしてはいけないわけです。

だから **conflict resolution** とは平和的に解決すること、紛争に至らせないことです。だから「紛争解決」とは言わずに「対立の解決」とレジメに書いておきました。ただ、そのためにどうしたらいいのかということは、残念ながら日本の政治指導者の場合にはわかってもらえないし、努力もしていない。だから私たちが考えなくてはならないのですね。

日本がいま考えている「対立」と言われることがいくつかありますね。一つは北方領土のことです。戦後日本ではずーっと、四島とも日本のものだと言われながら、ずーっとロシアが実効支配してきました。日本側はそれをけしからんと言っていますが、日本の地図を見ると、国境線が北方領土の北側ではないのですね。南側でもない。このことは、あまり話題にならないので私はずーっと話題にしているのですが、みなさん、お帰りになったらお子

さんの地図でもごらんになってみてください。

北の国境線は四本あるのです。四本あるからどこかわからないのです。一つは、稚内の北です。これはわかりやすい。それだけかと思うと、その北の方、サハリン＝樺太の真ん中に国境線が書いてあります。同じ赤の線です。

それに、北方領土の北側にあります。さらに千島列島の北側です。これは、私は文部省がやらせているのだろうと思って文部省に電話しました。「事実と違うではないか！」という抗議しました。学校で使っている地図で見たので文部省に抗議したのです。

そうしたら、それは外務省がそうさせているのだから、外務省に言ってくれということです。外務省にも電話して説明を聞きました。長ったらしい説明で、意味がよくわからないのです。簡単に言うと、(その国境線に関して)主張がある、ということです。そういう「主張がある」、というだけで千島に国境線をつけるということ。これはねえ、明らかに **conflict resolution** することではなくて、対立をあおるものですよ。これをロシア側から見れば、これはなんなのか、となります。日本の子供たちは、このような地図を使っています。そうすると子供たちはどこからどこまでが日本の領土なのかわからなくなってきます。

これは、独島、竹島のことと同じです。あの島も韓国が実効支配してい

る島です。日本政府は、あれは日本の領土だと言いつけています。その運動も、島根県あたりでやっていますね。

領土問題が紛争の種になって、紛争になり戦争になる場合が多いですね。とくにヨーロッパの場合は国境がしょっちゅう動いてきた、と言ってもいいですね。ヨーロッパではどのようにして解決したのか、と言いますと私が比較的長くいた国はフィンランドのことを話します。私が一番最初に行ったヨーロッパの国がフィンランドでした。モスクワで乗り換えていったのですが、フィンランドの一ヶ月ぐらいいました。そして驚いたのです。フィンランドはかつて帝政ロシアに支配されていました。その帝政ロシアと戦ったという歴史があります。

フィンランドは1918年に独立します。しかし間もなく共産主義国となったソ連から侵略されます。その地域がフィンランドの南の方の南カレリア地方という、一番大事なところです。フィンランドは寒い国ですがそのなかでも一番暖かくて、農業もできる場所ですが、そこがレーニン、スターリンによって占領されました。

フィンランドはこれに抗議してソ連と戦争を始めます。そんなことで国境問題として南カレリアをどうするかは大問題でした。その他にたとえば、デンマークにとって首根っこに当たる部分の土地をドイツにとられています。これもたいへん大事なところです。その他に、ポーランドなどは国境線が大きく動いています。

これらの問題をどのように解決するのか、ということを目撃していたのですが、今のECができる前の大事な会議でヘルシンキ宣言が発せられました。そのことは簡単に言うと、ヨーロッパの国々が、ECに加盟する国々は今後国境線についての要求は一切しない、と決めたのです。これを見たときは驚きました。あれほど深刻な国境線問題、侵略の問題これほど長く戦って、多くの血が流されて、それを一切あきらめる、ということです。これは大変な決断ですね。対立を解決するときはこういうこともしばしばあるのです。ただ、日本のようにナショナリズムを煽って、相手の国はけしからんということだけ言っているのでは本当の外交なんてできないのです。

ごく最近、中国とアメリカとの間で話し合いができるようになりました。この前までなにがあったかという、公海で軍事演習をしていて北朝鮮との間であの対立がありましたし、すぐ西の方の韓国の島に攻撃があったし、韓国の哨戒艇の「撃沈事件など、南北朝鮮、アメリカとの対立はたいへん激しかったですね。それからわずかの時間しか経たないのにお互いに話し合おう、ということになっています。これがいわば外交なのですね。こういう柔軟性がない国は外交なんてできません。それから、私がここで言おうとしているさまざまな対立点がありますが、それも平和的に解決することはできないでしょうね。

ところが、日本の新聞、テレビ雑誌

などは、なにかがあると激昂して、いまにも北朝鮮と戦争が始まるとか、中国と戦争が始まるというような論調が一気に流されます。これは大変危険なことです。そこで私たちが外交の基本のことや対立の問題などをどう解決するか、ということを私たちが主体

的に考えて、このようなナショナリズムを煽りたてるような政治戦略、プロパガンダに乗っからないような訓練をしなければ、先ほど言ったアジアに対する差別意識が強固にある以上、大変危険だと思います。

平和のための行動の学習 — <指示待ち>を超えるために

時間が迫ってきたのでこれから先は簡単に話します。私たちは行動のための学習が必要だと思います。いかに行動すべきか、ということです。これは他の国でも言えるかも知れませんが、とくに日本の場合は行動が弱いのです。平和のための行動が弱いのです。行動とは意思を示すことです。街頭行動で示すこともあるし、文章で示すこともあるし、選挙も平和のための行動として有効な場合もあります。その中でもとくに政治に影響を与えるような行動については弱いですね。

そして労働組合でも、その他の政治団体でも上からの指示待ち行動、こういう傾向がまだまだあります。これでは積極的な、強い行動がなかなかできません。この行動のための原則、ということ簡単に言うと一つは非暴力です。二つ目は専門家の言うことを聞いているよりもむしろ、さまざまところで会話や討論をすることが必要です。三番目は訴訟による運動は日本ではたいへん多いですね。それはなぜかというと、70年代に公害問題が多く起きて訴訟で企業に勝った例が多

いのです。それが平和の運動にも引き継がれていきます。

相手が政府となると訴訟による運動には限界があるのです。二番目には新しいデモなどが起こってきましたね。それに学ぶ、ということです。私はこのことでたいへんおもしろいことですが、私は毎年韓国へ通っていますが、韓国のロウソクデモというのはたいへんおもしろいですね。ロウソクですから、いつも夜に行います。これまでにその大きいデモは今から三年前ですね。中学生や高校生が起こしたのです。それをインターネットで呼びかけます。それだけではなく毎晩それ続けるのです。そして、パソコンでグループをつくって、情報をネットで流すのです。実況です。どのくらいの人数が集まって、「デモ隊が今どこを歩いている」とか「警官がどこに集結している」とかですね、この実況放送を、毎日流します。

そうすると、行ってみようかという人が出てきます。これのほとんどはアメリカ帰りの青年が、牛肉の輸入の自由化に反対して高校生が立ち上がったの

です。それがまたたく間に 10 万人以上のデモに発展していくのです。ソウルを埋めるようなデモになっていっ

たのです。デモの組織や動き方など、そこには党派を超えてネットを使った活動を行っているのです。

「もう一つの平和問題—原発事故から学ぶ」

最後の項目です。「もう一つの平和問題—原発事故から学ぶ」ですが、かって平和の定義は戦争のない状態を平和と言っていました。1960年代から70年代にかけて、そのようなせまい定義づけはやめようではないか、という議論がありました。つまり、人権抑圧とか、あるいは貧困などでまともな生活もしていけないような、そのような状況を「平和な状況」と呼ぶわけにはいかない、という議論になって平和の課題が広がってきたのです。

今回の原発事故はあの大震災から起こるわけですが、それによって肉親を失って、家を失い、仕事も失って、もっとも大事なことはこれからの生きる目標がなくなったということでしょうね。

原発事故がなければ、なんとかもとの所に住んで、またいずれは自分の町や村に自分の家をつくるという目標はありますね。やがて地域の産業が復興して、就職口が見つかるというあてもあるわけですが、原発の被害を受けた地域はこの先どうなっていくのかわかりません。この悲惨な状況はたいへんなことですよね。

この原発事故がどうして発生したのかということは、これはあまり語る必要はないと思いますが、忘れてはな

らないことは、私たちの社会教育の問題であります。国家が中心になって「原発神話体制」「原発安全宣伝」を大がかりに国家的に行った結果なのです。

政府のエネルギー政策は、原発を中心に進んでいくのだということをも自民党の時代に決めました。そして官僚たちがその方針にくっついて、そのマスメディアが完全に乗ってきた。読売の場合は正力松太郎ですね。彼が中心に原発政策を引っ張ってきた。朝日もそれに、みごとに乗りましたね。朝日の場合は、時期ははっきり覚えていませんが、「原発には反対しない」ということを社是として、社の方針として決めました。いったん決めてしまえば新聞社というのはそれをずーっとそのまま通すのです。そういうものです。

つぎは学校教育の問題です。エネルギーの問題についての学習課題について指導要領は原子力が中心に据えられています。しかも中学校用と高校用の副読本を作りました。私はこれはひどいものだと思いましたが、著作は文部省と通産省の両方です。原子力エネルギーの活用が一番いいことなのだということ、そしてそれは安全だということ、安いということが書かれて

います。さらにエネルギーの原料、すなわち放射性物質のリサイクルができ、繰り返し使えるということ、こういうことが副読本書いてあります。それ（副読本）を一生懸命に使わせようとした。この副読本が、実際にどこまで使われたかは調査できていませんが、そこには東大教授の名前が書かれてつくられています。おそらく多く利用されているのでしょうね。

社会教育の面でも、原子力館というものを、それぞれの電力会社がつくっています。たいへんに立派な建物で、ものすごい大きな建物です。展示内容

もあの事故が起こった後も同じ内容でやられています。そこに結構行く人が多いんですね。私も静岡県の浜岡原発のすぐ隣にあるその施設にわざわざ見に行きました。ものすごい金をかけたもので、年中無休、入場料無料です。環境問題が大きく取り上げられて、総てとっていいくらい地球温暖化問題に集中していました。温暖化の問題とエネルギーの関係では原子力が一番いい、ということになります。安全問題など大事なものは無視されてきました。

「がまん」と「がんばれ」のナショナルな運動

そしてあの事故が起こった後、私は新しいナショナリズムの運動が起こっているのではないかと思うのです。レジメでは、『がまん』と『がんばれ』のナショナルな運動」と書きました。日本人が全員、一体となって「がんばれ」、そして「がまんしろ」ということ、そういうことが宣伝されているのではないのでしょうか。自殺が急増しています。がまんと強制する、ということは自殺を増やすということなのです。この方はあまり言わずに、「がんばれ」の運動が広がっている。これは新しい戦争体制を作るための準備の

ように私には思われますね。どうすれば国民全体をある一つの方向に向けて誘導できるか、原発の神話と、事故が起こった後の先ほど言ったナショナルな運動によってこれらのことが示されています。これは大変危険なように私は思います。

そういうなかで大連立が問題になっていますが、私はたいへん恐ろしいことだと思います。かつて「一億一心」ということが言われました。それと同じ運動が行われようとしているということです。

アメリカ原子力艦の危険性無視

最後にこれだけは言っておきたいと思っていることがあります。

それはアメリカ原子力艦の危険性が無視されているということです。今

回の事故を契機に「原発」の危険性について新聞や報道でも多く指摘されています。危険な「原発」は発電所以外にもあるのです。アメリカの核艦船の原子炉です。しかもその原子炉は動いているのです。原子力潜水艦と原子力空母には原発と同じものを積んでいるのです。それらがしょっちゅう日本の港に入ってきているのです。配った資料の中に米原子力艦船寄港の数字が書いてある資料があります。見てください。

平和のためのいろんな情報を流しているピースデポが発表している情報です。この情報は先月末に出された本（NPO 法人ピースデポ「イアブック『核軍縮・平和 2011』高文研」）に書かれていますので、一番新しい情報です。1964 年から 2010 年（昨年）までの記録です。一番上の欄が横須賀です。次の欄が佐世保です。その下が沖縄です。沖縄のホワイトビーチはアメリカ軍の軍港です。昨年 2010 年の横須賀の欄に回数が「26 回(6)」と書いてあります。この「(6)」は水上艦ですから、原子力空母のことです。残りの数字は原子力潜水艦です。だから潜水艦の方がたいへんの多いのです。

港に滞在した日数は 287 日間です。そのうち水上艦は 184 日というわけです。横須賀だけでも随分長期間使っていることがわかります。

原子力潜水艦は原子炉が一つです。原子力空母はベラボーにでっかいので、そのぶんでっかい原子炉を二つ積んでいます。これについてアメリカか

ら 20 年以上前に報告書が出ているのです。その報告書は、ジャクソン・デイスが書いた「日本の港に停泊した軍艦における核事故」という膨大な資料ですので、コピーもしきれません。まえがき部分の要約だけをコピーして、みなさんにお渡ししました。

その当時は、佐世保と横須賀と呉の 3 カ所に原子力潜水艦が出入りしていました。まだ、原子力空母は入っていませんでした。ここでは二つの事故について想定しているのです。一つは核兵器事故で、プルトニウム 239 を 5 kg を有する核弾頭 1 個が 3 時間の船舶火災で燃焼した、という想定です。もう一つは原子炉事故で、炉心溶融と格納容器の破損により放射能を帯びた炉心の小部分が 4 時間にわたって周囲の環境に放出される、という想定です。南風が吹いているという想定です。

横須賀の場合だけでなく、どこの場合でも同じですが、100 キロから 110 キロ圏が汚染する、ということです。横須賀から見れば首都圏は全部入ります。千葉、埼玉、東京、神奈川、さらに山梨、静岡の富士山、伊豆半島も全部です。

実際には風の向きによって違ってくると思いますが、とにかくそのくらいの範囲までは影響を及ぼす可能性のある範囲です。

核弾頭が現在に日本に来ている原潜に積まれているかどうかは、現在は積まれていないという情報の方が多いのですが、実際のところはわかりません。もともと原潜は核ミサイルを発

射するためのものですよね。だから、今は積んでいなくとも状況に応じて積むことも考えられます。

というのは自民党が、数日前に党の方針を出しました。そこにはこれまでの「非核3原則」は「2.5原則にする」と書いてあるのです。それはアメリカの核を積んだ艦船の出入りは許す、ということです。そういう動きから考えると、核を積んでくる可能性は強くなります。

核弾頭の危険性とは別に、原子炉事故で4時間にわたって放射能が流出した場合の方が、被害が大きくなります。横須賀の場合を見ると、この46ページと書いてあるところの下の方を見てください。

以下の「」内は、(W.ジャクソン・デビス「日本の港に停泊した軍艦における核事故」研究委託：核兵器事故をアセスメントする会、発行：環境研究所 1988年6月)より

「放射性物質の雲を生ぜしめ、最も普通の夏風の条件下で、その雲は東京へ移動するであろう。」と書かれています。そして「個々の放射性核種（例えばヨウ素131）の濃度は場合によっては東京全域でアメリカ連邦政府限界値を超えるであろう」と書かれ、具体的には「個々の放射性核種の地表沈着は、最悪の条件下で、東京全域および事故地点から110km以上におよぶ地域で、連邦政府限界値の数100倍（セシウム137）を、そして10,000倍（ヨウ素131）を超えるであろう」と書かれています。

被曝による死者の数まで具体的に想定されています。「放射性降下物による中期的、および長期的（地上照射）によって最初の一週間でさらに死者数は25,565人増加し、その後の一年でさらに26,994人が加わる」「重度の遺伝障害による死亡者がさらにそれらと同数加わる」「したがって、一年間避難をしなかった場合、潜伏ガンによる死者数だけでも77,530人となり、重度の遺伝障害によって、さらに同数の死者が加わることになる」と。

「死者が想定される被害地域は直径100km以上の地域であり、横浜、東京、船橋、千葉、川口、川崎藤沢、八王子、大宮、土浦、川越、平塚といった主要都市が含まれる」と具体的な都市名まで明記されている。

原発の被害について大きな社会問題とされている現在、このように10数万人におよぶ死者の数字まであげて想定されて、アメリカ原子力艦船の危険性が指摘されているのです。こんなたいへんなことはなにも問題になっていないのはどういうことでしょうか。ここに書かれている事故の想定は、原子力空母の配備の前に書かれたものです。したがって原子力潜水艦事故を想定したものです。

たしかに横須賀では反対運動を起していますが、どちらかというと原子力空母に対する反対運動の方が盛り上がりは大きいのですが、実際には原子力潜水艦の方が事故の可能性が大きいのです。空母よりは小さくて、

弱い船ですからね。小さくても「核」の威力は同じです。こういう事実をち

ゃんと知らなければなりません。

アメリカは事故の責任を負わない

もう一つ言っておきたいことです。が、このような事故が起こった場合、アメリカはその事故についての一切の責任は負わなくてもいい、ということになっていることです。これは日米地位協定でそうなっているのです。これについての資料は、機密文書です。

「日米地位協定の考え方」という機密文書を琉球新報がすっぱ抜いて本にしたものです。琉球新報からは、これについて具体的に解説した本も出ています。



その第4条にこう書かれています。「合衆国はこの協定の終了際又はその前に日本国の施設及び区域を返還するに当って、当該施設及び区域をそれらが合衆国軍隊に提供された時の状態に快復し、又は回復の代りに日本国へ保証する義務を負わない」（琉球新報社編「外務省機密文書・日米地位協定の考え方：増補版」2004年・高文研）と。これはどういうことかということ、例えば土壌や環境を汚染しても汚染の前の状況に戻さなくてもいいですよ、ということ

です。だから事故を起こしたら、「もう横須賀は使わないよ」といってさっさと出て行けばそれでいいのです。どんな損害を与えようとも、アメリカは1銭も支払わなくてもいい、ということです。こんな内容の協定が日米地位協定の第4条で決められているということもあまり知られていません。

ならば他の国との関係はどうなっているのか、と調べてみました。これはドイツの場合です。ドイツの場合はドイツの法律にしたがって、現状に快復しなければいけないと「ドイツにおける NATO の地位協、補足協定」の54条AとBに書いてあります。ドイツに対しては保証をちゃんとしなければなりません。だから、危ないものをドイツには持って行かないし、同じような協定は韓国にもあります。だから韓国にはこのような危ないものが出入りする港はないのです。こういうこともたいへん大切なのです。

こういうことを、みなさんがご家族の方々とも話題にできるように、と思いついていくつか資料を準備しました。ぜひご活用くだされば幸いです。これで私の話を終わります。（拍手）

加害の事実を伝える意義と平和のための学習（講演レジメ）

I、加害の事実を伝える意義

- 1、ウイーンで —— 二つのユダヤ人博物館と「戦争とファシズムの戒めの記念碑」（王宮とオペラ座の間、1989 年）

＊ 東京の記念碑はどうか → 西郷隆盛でよいか。

- 2、加害の学習をさまたげるもの

① 軍備拡大政策のため

② 否定的事実を認めたくないというナショナルな心情。—— その背後に日本以外のアジアの人たちに対する差別意識がある。

- 3、加害の事実の学習を重視するかどうかは日本人が他のアジアの人たちと真に連帯できるか、できないのかを決めるかぎである。

＊ 事実を認めようとしない国民を、被害を受けた国の人たちは信頼できないであろう。

II、戦争学習をさらに進めるために

- 1、戦争被害の学習は、ヒロシマ、ナガサキ学習や、東京大空襲学習などでよいか。

治安維持法を中心とする戦時体制の学習と戦後の抑留・引き上げ体験。

- 2、撫順戦犯管理所での事実を伝えること。

- 3、戦後の軍拡と戦争 —— 水爆実験、ベトナム戦争など。

- 4、以上を重視した、日本近現代史博物館の必要 ← 遊就館になぜ若者が集まるのか。

III、軍拡の学習と対立の解決（conflict resolution）の学習

IV、平和のための行動の学習 —— <指示待ち>を超えるために

V、もうひとつの平和問題 —— 原発事故から学ぶ

- 1、安全神話体制 —— 産・政・官・マスメディア・学校教育・社会教育・環境運動

- 2、がまん「がんばれ」のナショナルな運動

- 3、大連立の危険性

- 4、アメリカ原子力艦の危険性無視